①読売新聞　2012年2月11日

心想粋

3年前、富山市の某小学校で、5、6年生の子どもたちに「子どもの頃の夢が今の夢」という講演を行った。小学生を相手に講演をするのは初めてだった。自分が小学生だったら何を聞きたいか考えて演題を決めた。

少し騒いでいた子どもたちも、「幻の滝」として知られる黒部剱沢大滝の撮影に僕が挑むビデオをスクリーンに映すと静かになった。洞窟のように狭い渓谷の上空を綱渡りするスリリングなシーンだった。雪崩に巻き込まれたり、雷に打たれた時の話、登山用のガスボンベが目の前で爆発して九死に一生を得た話もインパクトがあったようだ。

子どもの頃の夢が今の夢

志水哲也　写真家・登山ガイド

1965年横浜市生まれ。登山家として国内外で記録を残す。97年、黒部市に移住。写真集に「黒部」「日本の幻の滝」など。

皆に将来の夢を聞くと、「野球選手になりたい」「看護師さんになりたい」「政治家になりたい」とさまざまな答えが返ってきた。損得にとらわれない、自分の可能性を信じて疑わない思いが眩しかった。「写真家になりたい」という子どももいた。

自分が写真家になりたいと思ったのは中学高校生の頃だった。登山家として世界を旅したのが20代の頃、そして今、写真家として、登山ガイドとして生きている。僕が山や写真に興味を持った背景には何があったのだろうか。小学生の頃、先生に教わったこと、見たもの、出会った人、細かいことは覚えていないが、そうした経験がきっと大きく影響しているに違いない。

目指すものをあきらめて仕切り直したり、変えたりすることなく、同じもの、同じ延長線上で、砂山を積み上げるように今まで生きてこられたことを幸せに思う。子どもの頃の夢が、僕の今の夢だ。（この講演がきっかけとなり、昨年、45年間の半生記を綴った『生きるために登ってきた』＝みすず書房＝を刊行した）

②読売新聞　2012年4月2日

心想粋

2009年5月、僕が住む黒部川扇状地に1羽のメスのトキがやってきた。中国から贈られてきたトキを人工授精、飼育して2008年に初の放鳥が佐渡島で試みられた。その10羽のうちの1羽だった。

昨年からこのトキを撮っているが、見ればみるほど、表情が多彩なのに気づく。サギの群れの中に入っている時は落ちついて餌を食べている。

トキに学んだ豊かな自然

志水哲也　写真家・登山ガイド

トビ、カラスはもちろん、自分よりずっと身体が小さいカモメにもちょっかいを出されて、一目散に逃げる臆病さ。カエルは大きくても一飲みだが、硬いザリガニは大きいと吐き出してしまう。晴れた日の昼間は水浴びをすることがあり、無数の水滴を周りに散らして飛び立つ様は躍動的だった。

黒部川扇状地の海岸部は意外と気温が高く冬でも湿雪や雨が降るが、今年は積雪が多かった。田んぼが雪に覆われ、餌場を求めて、埋まることない用水路を行き来していた。雪の上をよたよたと歩いて転んだ時の間が悪そうなしぐさは忘れられない。

僕は今まで屋久島、白神山地、小笠原などを撮影してきて、そこに住んでいる写真家にいちばんかなわないと思ったのが野鳥や昆虫、動物を被写体にした撮影だった。これからは黒部に住んでいることを活かし、風景だけでなく、生態を学びながら動植物の写真を記録していきたい。

「なぜ君はここに来て、佐渡に帰らず住み続けているの？」。ここにトキがいることは水や土壌の豊かさの証しなのだ。かつて黒部川扇状地にたくさんのトキが、淡いオレンジ色に空を染めていたのだろう。そんな風景に思いを馳せる。

「心想粋」は毎週月曜日に掲載します。

③読売新聞　2012年5月29日

心想粋

「ここはゴキブリも棲めない所なんです」。剱御前小舎管理人・坂本心平さんは言った。5年前から一年の半分の営業期間、この小屋を守ってきた人間の言葉には重みがあった。日本海側の標高3000㍍級の山の豪雪と寒気、生きものが冬を越すことを許さない環境なのだ。

僕は昨年から剱岳をテーマに、剱御前小舎をベースにあちこちを撮影している。日本の山は、高さや大きさ、容姿は、ヒマラヤやアルプスなどに劣るかもしれない。僕が日本の山岳にこだわるのは、日本列島は中緯度にあり、生物がもっとも多彩な環境だからだ。また、海に狭まれ細長いのに、国土の70％を山地が占めるこの国の森林と渓谷は変化に富み、世界に誇る美しさだと思う。日本一険しいとされる剱岳や槍穂高連峰でさえ、乾いた砂地に高山植物が咲きチョウが舞う。岩壁の隙間には木々が生い茂り秋には燃えるような錦繡に染まる。地形が険しければ険しいほど、気象が厳しければ厳しいほど、そこに生きるものの鼓動や力を尊く感じられる。

狙うは生命宿した剱岳

志水哲也　写真家・登山ガイド

剱岳の山麓・馬場島の森では春にはオオルリ、キビタキ、ウグイスなどの野鳥が求愛の美声をあげ、黒部下ノ廊下の渓ではキセキレイやミソサザイなどが水浴びをし、遥か上空からイヌワシがヤマドリやノウサギを狙っている。

今までプロアマ問わず多くのカメラマンが剱岳を撮ってきた。この山に魅せられた者の多くは自分も含め、主に岩と雪、雲と光の織りなすドラマチックな世界をとらえたいと考えたのではないか。しかし最近、そんな厳しさに耐えて生きるものに、とめどなく興味が湧いてくる自分に気づく。ゴキブリすら棲めない過酷な自然の中に、生命を探し、潤いのある「剱」をとらえてみたい。

④読売新聞　2012年7月23日

心想粋

梅雨時に、夏を先取りするように昨年世界自然遺産になった小笠原を旅した。東京からフェリーで26時間で週1便しかない。最低でも1週間かかり、今回1便見送り、2週間の旅だった。

小笠原の厳しい自然保護

志水哲也　写真家・登山ガイド

「東洋のガラパゴス」と言われるが、空港のない分、ガラパゴスよりガラパゴス的なのだ。子どもの頃から憧れていた僕が、初めて小笠原を訪れたのは3年前。今回2度目の来島で、将来小笠原をテーマに何かできないか模索したかった。

青過ぎる海、眩し過ぎる太陽、海を渡るやさしい風に無音で肌を撫でられながら、クルーザーや徒歩で各地を巡った。シュノーケルでの水中写真にも初挑戦した。

イルカやクジラ、巨大エイ、アオウミガメ……。山岳ばかりを対象にしている自分にとって知らない世界いっぱいの小笠原。行けば撮れるに決まってるものを撮るのは嫌いだ。知らないものに挑戦することに人間の可能性を感じる。

小笠原は洋上島だから固有種が多く、外来種の天敵に抵抗力がない「ガラスの生態系」と言われる。そのため、おそらく日本一厳しく規制されている。小笠原諸島で上陸できる部分はわずかだ。遊歩道も大半は東京都公認ガイドが同行しないと入れない。入る人数の規制もあり、キャンプは禁止。僕は日本中を旅し、それぞれの地で起きている自然破壊、規制、観光化を、地元立山黒部と比べたりしながら、それぞれ違う問題を感じながら見てきた。

あっという間に2週間が流れ、撮影したい課題をいっぱい残して島を離れる。クルーザー十数隻がフェリーを追って行けるところまで行き、「また来て」「いってらっしゃい」などと大声で叫び、100人以上の人が海に飛び降り、泳ぎながら大きく手を振る。それを見ながら、自分が小笠原で将来何かできるような気がした。

④⑤ 読売新聞　2012年10月29

心想粋

黒部川河口にトキが棲むようになって3年半。今年は佐渡島で初めて自然繁殖が確認され、マツの木の上で親鳥が雛に餌を与える微笑ましい姿が全国放送され大きな話題になった。同じ頃、黒部のトキは八つの卵（無精卵）を産み、ローカルニュースで報じられた。

志水哲也　写真家・登山ガイド

黒部にトキが棲む意味

黒部のトキは一羽で棲んでいてかわいそうとか、雄のトキがくればいいのにとよく聞くが、ヒネクレモノの僕は、人間の勝手な感傷だと思っている。人だって結婚しないより、するほうがいい（幸せ？）とは限らない。佐渡島では一00羽近いトキが自生、ようやく自然繁殖が確認されたばかりで黒部川河口でそれを考えるのは時期尚早。ならば、佐渡島に帰した方がいいのではという意見もあるが、ここにトキが在ることの意味と未来への期待を感じる。

トキの側からしてみれば多くの野生動物同様に「生きるために」必死だっただけなのだろう。わが国の山地の豊かさの指針は食物連鎖の頂点にいるイヌワシの生息数ではないかと思っている。トキが棲める田園地帯も自然の豊かさ、美しさの証しの一つだろう。佐渡島では「トキが棲める環境作り」をスローガンに掲げ、農薬を使わず本来の自然を保とうという活動などを島内外にアピールしている。

黒部のトキを見守ってきた人たちがいる。飛来直後、環境省から依頼されたボランティアの観察員4名を含む地元の有志24名で「朱鷺写真愛好会」ができた。トキとの共生マナーチラシの配布、飛来地の清掃、積雪時に備え休耕田の借り上げと井戸水の注水、長く棲み続けられるよう地元団体への協力依頼など、行動的に尽力されてきた。黒部市では黒部のトキに「トキメキ」という愛称を付け「住民票」を与えるなどした。地元の多くの人がこのトキを愛し、このまま黒部川河口に棲み続けられるよう願っている。

◇

志水さんの新刊「とやまグラフィックブック　朱鷺」（税込み一000円、tc出版プロジェクト＝076・432・3267）が刊行されました。

⑥ 読売新聞　2013年1月14日

心想粋

先日起きた遭難のニュースに、20年前のお正月、仲間と3人で剱岳を目指したときのことを思い出した。同じ小窓尾根からだった。冬の剱岳は日本海側の豪雪と山の姿形の険しさから国内でいちばん厳しい冬山とされる。立山黒部アルペンルートが動いていない時期、そこに登るいちばんポピュラーなコースは馬場島から上がる早月尾根。左に並行して迫り上がる急峻な岩稜が小窓尾根だ。

志水哲也　写真家・登山ガイド

剱岳 最も厳しい冬山

冬の早月尾根でも十分ベテラン向けのコースだが、それよりさらにエキスパート向きで、登頂後は早月尾根を下りる。順調にいって5日間、さらに予備に1週間。多量の食糧や燃料が必要で、どんなに無駄な物を削ってもザックは20キロを超える。夏山で30キロ以上担げる者でも、冬山で深い雪をかき分けながら進むのは難しい。

我々が目指した小窓尾根は連日降雪だったが、幸い大雪に遭うこともなく、4日目に頂上を踏み早月尾根を下りることができた。こんなにスピーディーにいったのは、深雪をかき分ける先頭の作業をほぼ同じ日程で小窓尾根を目指した9パーティーが交代して行ったからである。誰が先頭に立つかによって全パーティーのペースは変わる。

当時20代半ば、現役バリバリだった僕は変な意地から先頭に立ったときは誰にも負けじと全力で雪をかき分けていたことを思い出す。小窓尾根上部で側面を横切る時、ふいに足下の雪面が割れ雪崩れていった。とっさにピッケルを山側に刺し、事なきを得たが震えが止まらなかった。

今年はまだ山が白い春先の、雪崩の危険が減った頃、小窓尾根と早月尾根の間の池ノ谷を登りつめた三ノ窓で一週間くらい滞在しようと考えている。今、撮影している剱岳の仕上げだ。いちばん怖いのはやはり雪崩。時には予測できない危険を甘受しなければならないのが登山だが、トレーニングと地形などの研究を重ねた上で、入山時期を慎重に見極め、危険を最小限にして挑みたい。

⑦ 読売新聞　2013年3月4日

心想粋

もうすぐ東日本大震災から2年が経つ。津波による行方不明者は未だ多く、福島の原発問題とともに未来に多くの課題を残してしまった。

僕は17年間、春夏秋冬、南北アルプス、尾瀬、八ヶ岳、東北、北海道、屋久島……、数人のお客さんを連れて週末の度に全国の山のガイドを企画し催行している。営業している山小屋に泊まることは少なく、冬でもテントを担いで登り、キャンプし、雪を解かして炊事をする。

志水哲也　写真家・登山ガイド

電気のない生活ヒントに

テントの外では星や月が夜空に輝き、動物の声や、テントに当たる風音で自然の息吹を感じる。雪が積もればテントが埋もれないように夜中に起きて除雪を繰り返さなければならない。山登りは、ほんのわずかな時間ではあるが、電気のない生活を体験でき、電気がなくても人間が生きられることを知ることができる。「先進国」と言われる国の多くでは、電気のいらないスポーツや遊びは少ない。山登りのなかに、人が真の豊かさを求めようとする時のヒントがあるのではないだろうか。

今、人が生きやすいように進歩してきたはずの文明によって、人が危機に瀕している。そして、人が作り出した放射能と対極にあるのが自然だ。自然を見て誰もがいやされるのは、人類の本能なのだと思う。人類にとって文明よりも、もっと自然はかけがえのないものなのだという当たり前のことを、時として再確認する。

水力発電は山の自然を破壊し、例えば地震などで黒部ダムが決壊すれば、黒部川扇状地に住む数万人は一瞬にして消える。火力は二酸化炭素を排出して温暖化をもたらし、石油もいつかは尽きるであろう。そして、原子力は……。電気は便利さを追求した文明の象徴だが、人間は電気に頼り切った暮らしを、少しずつ見直していかなければならないと思う。そのヒントを山登りの中に見つけていきたい。

⑧ 読売新聞　2013年4月22日

心想粋

今月16日、今年もアルペンルートが開通したので行ってみた。「雪の大谷」は例年より高い18メートルの雪の壁ができていた。富山県内の平野部ではこの冬は雪が少なく助かったが、山は多かったようだ。標高2400メートルの室堂でバスを下りると吐く息が白かった。標高が100メートル高くなるごとに気温が0・6度下がると言うが、真冬のような寒さを肌に感じる。

志水哲也　写真家・登山ガイド

野鳥撮影 自制心忘れずに

歩いて10分くらいの所にみくりが池温泉がある。僕が周辺の山への入下山で必ず立ち寄る場所だ。山岳写真が目的で泊まる人が多く、ここで写真談議を交わしたり、山や写真の夢を語ったり、たくさんの出会いがあった。神秘的なエメラルド色のみくりが池を前景にした立山がいちばん好きだ。雪が解けて池の様相になるのは6月下旬頃だろう。

まだ雪に覆われていて、餌となるハイマツなどが出ていないからライチョウも姿はなかった。来月になれば美声とは言いがたいカエルのような声で鳴くライチョウの飛ぶ姿があちこちで見られる。求愛と、オス同士が威嚇し合う季節だ。今年からは僕は山岳の野鳥を撮ってみたいと思っている。

警戒心が強い絶滅危惧種などの野鳥撮影では、いい写真を撮ろうとすればするほど、野鳥にストレスを与えてしまうことが多い。最たる例はヒナを巣立たせるシーンの撮影だろう。カメラマンのせいで子育てを放棄してしまった例も多い。

今まで厳しい気象条件や地形にどう立ち向かうかが問題の山岳写真を主に撮ってきたが、野鳥写真では山岳とは違った自制や配慮、ルールを守ることの必要性を感じる。写真を撮り、その生物の尊さを世に伝えることは意味がある仕事だと思う。だが多くのカメラマンがいい写真を撮ることにとらわれて暴走しがちである。自分を含めた野鳥を撮ろうとする者の一歩引いた撮影姿勢が今問われている。それはまた、人が自然とどう接して生きていくべきかという問題に通じているように思う。

⑨読売新聞　2013年6月17日

心想粋

剱岳を撮影テーマにして3年、ようやく自分が撮りたいものが見えてきた。眺めるのではなく、頂上が見えないくらい近づき抱かれてみたい。この春、剱岳頂上からチンネ、三ノ窓、小窓ノ王、小窓と鋸の刃のように続く山稜

志水哲也　写真家・登山ガイド

春の剱岳 雄姿に息のむ

「剱岳北方稜線」に2回入った。

4月某日、真冬のような白い岩肌が撮りたく、あえて山で20～30㌢の降雪があった日に北方稜線のど真ん中、三ノ窓を一人で目指した。室堂から剱御前を乗り越し剱沢を下る。長次郎谷の上部では雪深く50㌢くらい潜ったが雪崩が怖いので休めない。池ノ谷ガリーは濃霧で視界ゼロのなか下り、目的の三ノ窓へ着く。

夕方、前ぶれもなく晴れ間が現れ、岩と雪、風と光、紺碧の空に雪煙がたなびく。まさに神が棲む雰囲気。その後風向きが変わり、風を除けて張ったテントに雪が吹き込むようになり、1時間も放っておくと四方からの雪の圧迫で寝返りも打てなくなる。埋もれたテントを掘り出すためにファスナーを開ければどっさり雪が入ってきて、テントは内も外も区別がつかない。眠る暇なく除雪を繰り返した。

ゴールデンウイークを挟んで5月にも北方稜線に同行者1名と入った。先月より雪も締まり歩きやすいので三ノ窓だけではなく、端の仙人池から剱岳まで歩いた。剱岳が水面に映る仙人池は雪に埋もれ、風が文様を描く雪肌がピンクに染まった後ろに聳える剱岳に息をのんだ。誰もいない世界。野鳥の囀りは先月はなかった生命観、まさに山の春を感じる。ロープを使った岩峰の上り下りを幾度も繰り返し、崩れそうな〝モナカ雪〟を慎重に登り頂上に達した。今年の夏はどんな剱岳に出会えるだろうか。

◇

志水さんの剱岳新作スライドショーと写真教室が7月3日午後7時からマムートストア金沢（076・262・1108）で、黒部の魅力を語る講演会が7月6日午前、黒部市宇奈月町浦山の中央公民館（0765・65・1810）で行われます。

⑩読売新聞　2013年8月5日

心想粋

7月6日は地元、黒部市中央公民館で「社会を明るくする運動黒部大会」が開かれ、その中の講演会で黒部の魅力を語った。黒部市のイベントで、来客200人のなかには県外からこられた方もいた。20歳の僕が宇奈月温泉街の

志水哲也　写真家・登山ガイド

黒部と僕の27年間

おでんや「安念」にやってきたのは梅雨明け前の雷が鳴り響くひどい日だった。1986年は安念の2階に、87年は黒部湖畔の山小屋にそれぞれ3か月半下宿して、黒部川を捉えようとその全支流に足跡を残した。

講演ではそれから27年間、黒部とどう接し、何を見てきたかを語った。幻の滝といわれる剱沢大滝を半月かけて登ったのは21歳の時。冬の駒ヶ岳で雪庇から落ちて雪崩に巻き込まれたのは25歳の時、あの時は登山を本気でやめようと思った。年に数回山でクマに出くわすが今のところ襲われてはいない。雷の電気が身体を走ったことは数回、建物の中でも雷が鳴ると落ち着かない。黒部下ノ廊下で落石にやられ息をひきとるカモシカを見守ったこともあった。

おそらく日本一険しい場所に湧く餓鬼ノ湯を2011年に再訪したら、入るのに適温の水たまりが誰が作ったわけでもなくできていて自然の神秘に驚いた。泳ぎと徒渉を繰り返す黒部上ノ廊下の沢登りにはほぼ毎年かよっているが、土砂の堆積で堰き止め湖ができたり、浸食して深い淵ができたり地形の変化が著しく、自然は生きものだと思う。そんな黒部での出来事を今まで数冊のエッセイ集や写真集にまとめてきた。

そして、今年の秋は黒部最大落差のサンナビキの大滝を紅葉の頃、見にいこうと思っている。1997年に始めてこの滝の存在を確認してから3度目の来訪だ。来年は東京で戦前の黒部の写真展が開かれ、展示する写真のセレクトを任されている。

講演では「27年間、出会いや別れがあったり、いいことばかりではなかったが、ここまで自分がやってこられたのは、たくさんの方にお世話になった。そのおかげです」と締めくくった。

⑪読売新聞　2013年9月30日

心想粋

渓谷の両岸が切り立った地形を「廊下」といい、黒部川の下ノ廊下、上ノ廊下は有名だ。下ノ廊下は登山道が付けられているが、上ノ廊下には道がなく、何泊か必要な沢登りコースだ。上ノ廊下をおよそ半日遡ると最大の難所が現れる。激流を渡ったり泳いだりしなければならない。

6年前、4人のお客さんを上ノ廊下にガイドしている時、この場所で人間が流れてきた。意識を失ったその人を日が当たった河原に運ぶ。衣服やザックが水を吸い、小柄な女性だったが重かった。上流で立ち尽くしている3人組がいた。聞けば4人スクラムを組むように流れを渡ろうとして全員流され、3人は運良く途中で止まり、一人だけ流されていったとのことだった。

自分のメンバー（女性4人）はこの事態を目の当たりにして怯えて声も出ない様子だった。遭難したパーティが下る手助けをして、すぐ小屋まで戻り救助を要請するようアドバイスをした。その後、ロープを付けて激流を渡っているとき、一人が流れにのまれ、仰向けになった顔の上を水が流れる。即座に駆けつけ、彼女の肩を持ち上げ、ことなきを得た。彼女は何が起こったのかわからない様子だったが、秒単位の判断の遅れが致命的になる。途中で2泊して黒部源流にある山小屋に行き、遭難した女性がヘリで救助され一命を取り留めたと知った。

志水哲也　写真家・登山ガイド

女神と悪魔の棲む難所

3年前には単独で上ノ廊下に入った友人がこの難所で流されて死んだ。今年の夏も上ノ廊下を歩いた。梅雨明けが遅れたのでお盆頃でもまだ水量が多く苦労した。近年浸食が進み、難所の数も増え5年以上前よりだいぶ時間を要する。僕が最初に上ノ廊下を歩いたのは1987年、20回以上歩いてきたが、日本国内比類のない開けっ広げな原始のようなものを感じ、この渓谷は生きていると感じる。そして上ノ廊下には美しい女神と悪魔が棲んでいる。

(12) 2013.11.18

13版 富山2　地域　30

心想粋

全国でどこの紅葉がいちばんかとよく話題になる。全山真っ赤に染まる日光や京都の紅葉もいいが、ブナの自然林を核とした本州の山地の紅葉はいろんな色が交ざり多彩である。ダケカンバやブナは黄色に、ナナカマドやウルシは赤に、ツガ、スギなど常緑の針葉樹も交じり、イタヤカエデなどは赤くなるものも黄色になるものもあるといった具合に……。富山では有峰、立山黒部アルペンルート周辺、黒部峡谷鉄道沿線などで身近に山の紅葉を探勝できる。

10月中旬、黒部峡谷鉄道の鐘釣駅から2泊3日でサンナビキ山の下にかかる巨大滝を往復した。この滝は黒部川の全支流を探査していた1999年夏に見つけた。発見とは思っていないが、写真や文章でこの滝についての記述や写真は見たことがなかった。99年に自分が上梓した『黒部へ』（白山書房）で「サンナビキの滝」と仮に名付け、推定落差5段160㍍と発表した。

97年に紅葉を纏ったこの滝を見たくて訪れたが、紅葉には早かった。黒部川からサンナビキ谷を遡ってこの滝に到達するのは無数の滝があって困難なので、隣の支流の似合谷を登って山越えしてこの滝を正面に見られる地点を目指す。秋の冷たい水に腰までつかり、瀑水をあびて滝を登り、源流は岩壁となっているのでロッククライミングし、背丈より高い灌木の林をかき分け、地図とGPSを頼りに進む。

滝が見えても落差160㍍の全貌が眺められるポイントは一点しかない。2日目の朝、そこへたどり着く。あえて雨の予報の日を選んだがぬれた岩や木々はしっとりと艶やかだった。大岩壁を5段で落ちるサンナビキの滝の姿はまさに鮮烈だった。

雪崩に洗われた大岩壁、過酷な地形に張り付くように生える無数の木々はたくましさと生命力に満ち、それらが今ここぞとばかりに輝く姿こそ黒部の紅葉の魅力ではなかろうか。黒部にはこれほどの滝がまだほとんどの人に知られることなく存在する。僕はそこを自分だけの聖地だと勝手に思っている。

志水哲也　写真家・登山ガイド

黒部の巨大滝 輝く紅葉

心想粋

大正14年(1925年)8月、戦前の登山家、冠松次郎ら12人は作業道や登山道がなかった時期の黒部下ノ廊下の初踏破に成功、支流二つが同じ地点で十字に黒部川に合わさる奇景を発見して「十字峡」と名付けた。その後、剱沢大滝

志水哲也 写真家・登山ガイド

教育とカルチャー

「黒部の父」生き方指針に

登山。戦後も生涯を通じて写真と文章でその魅力を紹介し続け「黒部の父」といわれた。

大正から昭和の初めにかけては日本の近代登山が岩登りや雪山、アルプス、ヒマラヤへと西洋的なアルピニズムに向かっていこうという節目の時代で、「谷」は頂上に上がるための登路だと考えられていた。それを覆して「谷」自体を目的にした登山を行い、力を表現した。渓谷を中心とした独自の考え方があること、日本固有の山の魅力を示すことになったその意義は今日なお大きい。

僕は20歳で黒部渓谷に魅せられ、首都圏から宇奈月へ移住し、黒部をさまざまな角度から探求したいと思い活動を続けてきたが、遠い指針にはいつも冠松次郎があり、追いかけていたように思う。若いどう熟成させるか。何か使命感のようなものを持って生きていけたら素敵だ。およそ1世紀、時世の違いはあるが、頑とした一筋の生き方に教えられたものは多い。

3月4日から5月6日まで、東京都写真美術館で冠松次郎と穂苅三寿雄の写真展「黒部と槍」が開催される。昨年から展示作品の選定や執筆などの仕事に携わってきたやすいガラス乾板の写真機によって撮影されたもので、電源開発される前の黒部川の貴重な姿が数多く記録されている。

今年の秋、流れた89年間を考えながら、十字峡発見時の足跡をたどってみたいと思っている。

◇

写真展の関連イベントとして3月29日、東京都写真美術館(03・3280・0099)で志水さんの対談講演「黒部を撮る・黒部に生きる」が行われます。

※コラム・心想粋は月曜日から木曜日に掲載日が変わりました。「研究室へようこそ」「ハイライト」は終了します。

心想粋

前回、黒部のパイオニア冠松次郎のことを書いたが、黒部渓谷を探った先達は地元黒部にもいた。冠よりも前の時代に黒部を探り黒部保勝会を設立した吉沢庄作。北又谷柳又谷を歩き、その魅力を冠に紹介した塚本繁松。明治後期、黒部を最初期に探険した井上紅花を案内して「黒部の山の神」と讃えられた音沢村の山案内人・佐々木助七は今も地元で崇拝する声があるほどだ。

志水哲也 写真家・登山ガイド

黒部史の語り部 残した宝

僕はそんな黒部史を語ることができる先輩が2人健在だと思っていた。三俣山荘ほかを経営し黒部源流域を半世紀以上見てきた伊藤正一さんと、湯口康雄さん(朝日町)だ。湯口さんは教諭の傍ら、のちに黒部全流域を探査した黒檜山岳会を1963年に設立。登山記録がほとんどなかったサンナビキ谷、餓鬼谷などを探った。その後、奥山廻り、電源開発、山名由来などを調べ山岳雑誌に発表。さらに著書「黒部雑記」「黒部奥山史談」にまとめた。あまり語られることがない佐々木助七以外の黒部保勝会メンバーの人柄や功績を紹介したのが目を引く。

湯口さんの講演を聞いたことがある。奥山廻りで油紙をかけて雨を防ぎ露営し、火をどのようにおこしたかなどを具体的に語っていたのを思い出す。湯口さんのご家族によると実体験があったのではないという。

黒部という一貫したテーマを持ち、「黒部への思慕、渇仰」で郷土史、山岳史の執筆に力を注いできた。「黒部といつも何らかの形で関係していないと落ち着けなかった」と心境を語った。氏が先達に聞き取り、埋もれていた史料から発掘した事柄は放っておいたら消えてしまったかもしれない黒部のルーツであり、後に続く者にとって宝物でもある。

湯口さんは昨年11月26日、77歳で亡くなられた。街から見た山並みの絵図を依頼され、1年がかりでスケッチを終え、筆を持ったまま亡くなったという。人の生きる意味など人にわかるわけがないが、もし意味があるとしたら湯口さんが成したような仕事にこそあるのではないか。

心想粋

3月後半、鹿島槍ヶ岳を目指した。黒部川を下流から上流を見て左に連なる山脈が後立山連峰で、その盟主といわれる鋭利な峰が鹿島槍ヶ岳だ。富山県側から登るコースはなく、長野県側の大谷原から登るコースがある。雪崩のリスクのある3月は隣の爺ヶ岳へ登り、鹿島槍ヶ岳まで縦走するのが一般的だ。

志水哲也 写真家・登山ガイド

雪の爺ヶ岳 雲間に立山、剱

初日は降雪のなか、爺ヶ岳までのコースの中間くらいまで上がり、テントを張った。21日からの3連休で入山者も多く、近くに五つ程のテントが並んでいた。いつものようにパスタをゆでてウイスキーを飲んだ。風が一晩中テントをたたく寒い夜だった。

翌日は爺ヶ岳を目指した。一晩で新雪が20センチくらい降り、かんじきを付けても太ももまで潜った。深雪を最初にかきわけて進むことを「ラッセル」という。一列になって歩く際、2番目以降を歩く場合と比べてラッセルは何倍も労力がいる。ラッセルをして登ってこそほんとうの雪山だと思う。今回は最初からラッセルを任されることを覚悟していた。だが、足並みが揃った強いパーティーに先行されてしまい、その役割をあまり果たせなかった。

左右の切れ落ちたナイフリッジを越え、昼前に爺ヶ岳に上がると、突然富山県側の視界が開けた。立山、剱岳が雲の中に浮かび、その下には黒部川が横たわっている。黒部川の流れは深過ぎて見えないが、十字峡の位置は特定できた。今回は時間切れで、鹿島槍ヶ岳はあきらめて同じコースを戻ったが、この景色を見られて満足だった。

かつてこの時期、ここから剱岳を目指したことがある。後立山連峰から下りて黒部川を渡り、立山や剱岳に向かう登山を「黒部横断」という。1週間以上にも及ぶ黒部横断に毎冬、日本を代表する登山家たちが挑戦する。それを10回以上行った登山家和田城志さんは、「世界の高峰や難ルートの登はんも経験したうえで、雪の剱岳黒部こそ日本を代表する山岳だ」と断言する。和田さんこそ、冬の黒部を最も知る本物の登山家だ。

和田さんは、自らの登山人生を振り返り、「初恋と初登山は完全な同義語だ。風のように過ぎ去ってゆく」「ひとつの山を終えるたびに、ふたつ(常識と知恵)を手に入れ、ひとつ(ときめき)を失う」と著書『剱沢幻視行』(東京新聞)の中で熱く記している。

心想粋

剱岳を撮影テーマにして3年になる。登れば登るほど、撮れば撮るほど、剱岳の持つ多彩な魅力に気づく。

僕は離れた場所から眺めるのではなく、頂上が見えないくらい山の懐に近づいて撮るように努めてきた。なかでも、頂上の前に横たわるように連なる「八ツ峰」からの眺めが一番好きだ。八つの岩峰が連なることからその名が付いた。登山道は無く、クライマーのみが立ち入ることができる。下から一峰、二峰と八峰まで続く。

志水哲也 写真家・登山ガイド

剱岳・八ツ峰 鮮烈な夜明け

山小屋等に泊まって早朝から行動すると、八ツ峰に上がるのは昼間になってしまう。だが、カメラマンとしては、朝夕の時間帯にそこに居たいと願う。今年の4月中旬、早朝から一二峰間ルンゼ(傾斜50度の雪の壁500メートル)を駆け登り、八ツ峰の二峰に上がった。ゴールデンウィーク頃になると、雪の白色と岩の黒色のコントラストになるのだが、この時はまだ冬のように真っ白のままだった。左右とも500メートル切れ落ち、馬乗りになるのがやっとの八ツ峰の細い稜上の雪をスコップで削り、横になるスペースを確保した。

放射冷却だろうか、夜は4月としては寒かった。十分な装備を持って登るのは難しかった。カメラ機材もあった分、食料、燃料、寝袋などを削ったので、まともに眠ることもできない。

ただ、僕が眠れなかったのには、別の理由がある。風が全くなく、静かすぎるほどの夜だった。満天の星はあまりにも美しく、夜明けにどんな風景が現れるか想像すると、どうしようもないくらい目がさえてしまったのだ。

夜明けは鮮烈だった。魚の背びれのような細い雪稜が、剱岳へ屈曲しながら延々と続く。それらの色が濃い青から淡い青に、紫に、オレンジにと少しずつ変化していく。日なたと日陰がプラズマ模様を成しながら……。無風の静まりかえった空間に、乾いたシャター音がこだました。

素朴な疑問がわく。「僕がいまいるこの場所はいったいどこなんだろうか」と。これほど尊く思える風景と出会ったことがあっただろうか。探してきたものを見つけられたような安堵感だった。

あの時、あの場所で、生きてきてよかったと純粋に思えた。それだけでも僕はよかった。

心想粋

天候不順の夏だった。山岳ガイドの仕事、高山植物の撮影など、一年で最も忙しい時期が過ぎてほっとしている。

僕が週末ごとに募集しているガイドプランは、登山道を歩くものは少なく、沢登りや岩登りなどの上級コースがほとんどだ。最近参加されるお客さんは、男女比は半々くらいで40歳代のリピーターが多い。フルマラソンやトライアスロンの大会に出場した経験のある人、1日数十キロ走っている人、ジムに欠かさず通っている人など、身体を鍛えている人たちが大半だ。

志水 哲也 写真家・登山ガイド

減量して自己鍛錬の夏

最近は僕も、ささやかな企てをした。お客さんたちに触発され、「もう少しプロ意識を持とう」と一念発起したのだ。本職の山岳ガイドはいわば「レッスンプロ」で、もう一つの本職である山岳カメラマンも、本当の意味では「山岳のプロ」ではない。だから、これまであまり意識することなく過ごしてきた。

まずは食事制限をしながらトレーニングを重ね、2か月間で12キロのダイエットに挑戦した。役作りのために厳しいダイエットをこなすハリウッド俳優や、「減量は仕事ですから」とこともなげに話すボクサーのような、自然体で気負いのない姿にダンディズムとプロ意識を感じる。僕も山岳のプロとしての意識を持つようにしたい。

ルソーは著書「エミール」の中で、「肉体は魂に服従するためには頑丈でなければならない。（中略）肉体は弱ければ弱いほど命令する。強ければ強いほど服従する」と言っている。

僕にはかたくなな持論がある。そもそも生物は「食べられなくて明日野垂れ死にするかもしれない」という不安定な環境下で生きるようにつくられている。だから、僕も含めて一部の飽食の人や家畜などには、生活習慣病という負荷が与えられているのではないだろうか。

実際、太ったことで負担が増して膝を壊し、登山を辞めていった人は、僕の周りにとても多い。間接的ながら、肥満が原因で遭難に至った事例もある。写真作品にも、人となりがきっと表れる。怠け者なのでたぶん大したことはできないが、自己規制や身体の鍛錬を積み重ねることで少しは周囲の手本になれる存在でいなくては、と思う。

心想粋

早いもので、首都圏から富山へ移住して16年半になる。その間、「いつかテーマにしなければ」と思い続けていたのが、剱岳だった。実際に撮ってみて、自分と同じように剱岳を追っているカメラマンが多いことに驚いた。氷見の雨晴海岸から毎朝、立山剱岳を撮り続けているカメラマンもいるという。富山の人にとって剱岳は特別な存在なのだと知った。

志水哲也 写真家・登山ガイド

「剱岳百景」撮りたい

今秋、2011年夏頃から3年間撮りためた写真集「剱」（山と渓谷社）を出版した。テーマにしたのは、離れた場所から眺めるのではなく、頂上が見えないくらい山の懐に近づき、撮影ポイントでビバークして撮った「肉薄した剱岳」だ。

次は写真家として最初にテーマにした黒部を再び撮るつもりでいたが、剱岳に対してやり残している感じと、まだ撮りたい気持ちがあるのに気がついた。

10月、大日岳、種池、薬師岳、黒部下の廊下右岸から剱岳を望んだ。かつて剱岳から富士山を遠望したことがあったから、逆もあると思い、秋晴れの朝、富士山の頂上に登った。針の木岳と蓮華岳の間にうっすらと雪化粧した立山と黒くごつごつした岩の剱岳が、200キロ近く離れているのに、望遠レンズで見ると驚くほどハッキリと見えた。

やり残してるのはこれだと思った。次は、いろいろな山から見た剱岳の様々な貌を「剱岳百景」として撮るつもりだ。

いま、写真展「剱」を東京都内で開催している。県内でも、24日から富山国際会議場1階交流ギャラリーで、来年1月には宇奈月セレネ美術館で催す。会場に毎日滞在しながら、これからどんな剱岳を撮ろうかと思いを巡らしている。